

## 執筆者紹介

- 稲畑耕一郎（早稲田大學名譽教授）  
埋田重夫（静岡大學學術院人文社會科學領域教授）  
丸井憲（早稲田大學非常勤講師）  
柴崎公美子（文學學術院助手）  
辻リン（法學學術院准教授）  
岩田和子（法政大學法學部法律學科教授）  
郭濟飛（博士後期課程在學中）  
劉茜（博士後期課程在學中）

## 編集後記

- ◇「密」、二〇二〇年を代表する漢字。例年なら発表前の豫想にかなり迷うがこの年に限定的申した人は多かつたのではないだろうか。「新型コロナウィルス感染症（疫情）」の流行が一月に始まり、十二月に至ってもその感染の拡大は止まることを知らないという状況である。
- ◇本稿執筆時点で、世界では七〇〇〇万以上の人が感染し、死者数は一六〇萬を超える。各国が入国制限を行い、感染の移動が制限され、七月二十四日に開会する予定だった東京オリンピック・パラリンピックが二年延期になり、国内外問わず、各種イベントが中止もしくは延期を餘儀なくされた。
- ◇街ではマスクやアルコール消毒液などの品薄が続き、買い占めや高額転賣が相次いだ。病院では、入院病床や医療物資の不足による医療崩壊の危機が問題となった。緊急事態宣言は五月下旬に全面解除されたがその後も混乱は続いた。
- ◇ソーシャルディタンス、社会的距離の確保やマスク着用などの「新しい生活様式」が浸透し、感染リスクが高まるとされる「三密」を回避するために、ビジネス界では自宅などで勤務するテレワーク、大学では一〇〇%オンライン授業を導入した。
- ◇早稲田大學も例外ではない。二〇一九年度の卒業式、二〇二〇年度の入学式など様々のイベントが中止になり、講義開始も一ヶ月遅らせて、五月十二日から講義、演習、語學などすべての授業をオンラインで実施。十一月から演習など部分的に対面授業が開始されたが、入学してから一度も大學に入構せずに、二年に進級する新入生も出て来そうだ。
- ◇一年中國語の授業は、Zoomによるライブ配信とDigitalスタディシステムによるフルオンデマンドのブレンド型の授業形式をとり、クラスサイズを四〇名から二〇名にして、一年間授業を行った。
- ◇第四十五回早稲田大學中國文學春季大會はコロナ感染拡大のために中止になったが、秋季大會は十一月二十八日にオンラインで無事に開催された。会場に足を運ばなくても出席できるためか、前年度より多くの先生や學生が参加した。コロナ禍終息後の學會運営の新しい形を「豫感」させる。
- ◇地球規模の大きなうねりの中、お蔭様で學會が無事に開催され「中國文學研究」第四十六期を滞りなく編集・出版できた。皆様のお力添えに感謝したい。（不到）